

一般国道432号道路改良工事予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

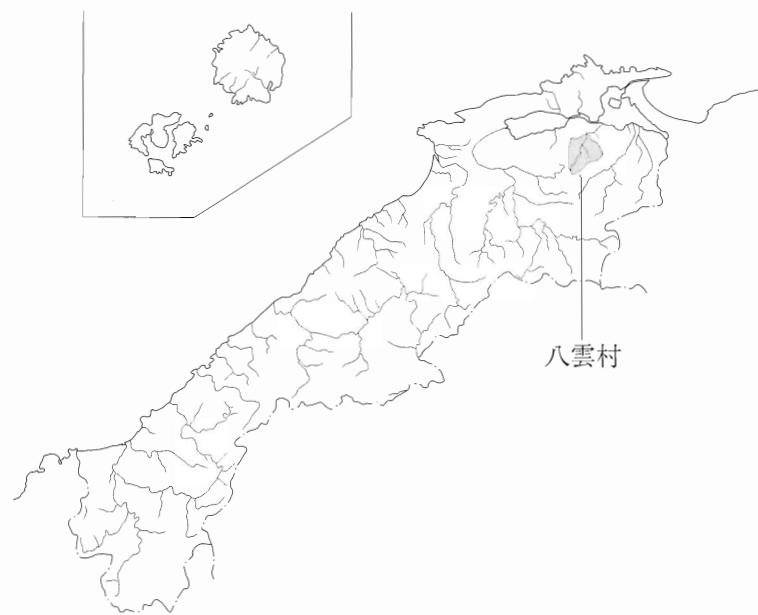
山崎遺跡
前田遺跡
(第I調査区)

平成11(1999)年12月

島根県八雲村教育委員会

一般国道432号道路改良工事予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ

やま ざき 遺 跡
山 崎 遺 蹟
まえ だ 遺 跡
前 田 遺 蹟
(第 I 調 査 区)



平成11(1999)年12月

島根県八雲村教育委員会

序

八雲村教育委員会では、島根県松江土木建築事務所の委託を受けて、平成6年度より一般国道432号道路改良工事予定地内（八雲村東岩坂地区）に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施しておりますが、このほど調査報告書第Ⅱ集を刊行する運びとなりました。

本報告書は平成7年度に行った山崎遺跡、前田遺跡（第I調査区）の調査成果をとりまとめたものです。

平成7年4月より開始しました現地調査は、島根県教育庁文化財課の指導を頂きながら慎重に実施しました。

本調査は、八雲村教育委員会が、多数の村民の方々の熱心なご協力を頂きながら発掘を進めました。

この調査では、落とし穴1個や多数の遺物が発見され、貴重な研究資料を得ることができました。

本調査によって、当時の状況が漸次明らかになって参ることは、まことに喜ばしいことではありますが、貴重な文化遺産が消えていくことに関しましては、誠に心寂しいものを感じます。

本調査を実施するにあたりまして、東森先生のご指導はもとより島根県教育庁文化財課から賜りましたご指導、ご助言、また、直接発掘調査にご協力いただきました多数の村民の皆様に衷心より敬意と感謝の意を表します。

平成11年12月

八雲村教育委員会

教育長 泉 和夫

例　　言

1. 本書は、島根県松江土木建築事務所の委託を受けて、八雲村教育委員会が平成 7（1995）年度に実施した、一般国道 432 号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2. 本書で扱う遺跡の所在地及び調査面積は次の通りである。

[山崎遺跡]

島根県八束郡八雲村大字東岩坂 49-1 番地外 7 筆 120 m²

[前田遺跡（第 I 調査区）]

島根県八束郡八雲村大字東岩坂 173 番地外 4 筆 394 m²

3. 調査組織は以下の通りである。

[平成 7 年度] 現地調査

調査主体 八雲村教育委員会 教育長 佐原通司

調査指導者 東森市良（島根県立安来高等学校教諭）

　　広江耕史（島根県教育庁文化財課文化財保護主事）

事務局 教育次長 伊野憲次（前任）－ 外谷康郎（後任）、藤田節子（嘱託）

調査担当者 川上昭一（社会教育係主事）

作業員 青戸和也、安部当子、石倉和義、石倉恒雄、石倉睦子、石原多鶴、石原政子、
稻田慎平、岩田節子、奥谷昭夫、金森高文、近藤仁一、庄司音松、田中和美、
西越イワヨ、春名民子、深津泰久、藤原秀子、槇本静江、山崎シマ子、山根隆、
山根利子

遺物整理 深津光子、武田裕子

[平成 11 年度] 報告書作成

調査主体 八雲村教育委員会 教育長 泉 和夫

事務局 教育次長 長島幸夫（前任）－ 三好 淳（後任）、藤田節子（嘱託）

調査担当者 川上昭一（社会教育係主任主事）

調査補助員 田中和美（臨時職員）、深津光子（臨時職員）

遺物整理 高尾万里子、武田裕子

4. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては以下の方々から有益なご助言を頂いた。記して感謝の意を表する。

西尾克己（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター）

中村唯史（島根大学汽水域研究センター客員研究員）

5. 本書で使用した方位は磁北を示す。
6. 本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行のものを使用し、「調査区配置図」は松江土木建築事務所の工事図面を墨書きして使用した。
7. 土壤および遺物の色調には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版を参考にした。
8. 「位置と周辺の遺跡」の遺跡番号は島根県教育委員会発行の『増補改訂島根県遺跡地図』I（出雲・隠岐編）1993年3月と対応している。
9. 石器の石材については「文化財調査コンサルタント株式会社」に鑑定を委託した。
10. 本報告書の編集と執筆は、上記の調査指導者や協力者の指導と助言を得ながら調査員が協議して行った。
11. 本遺跡出土遺物及び調査記録は八雲村教育委員会で保管している。

目 次

I 位置と環境	1
II 調査に至る経緯	3
III 山崎遺跡	7
1. 調査の経過と概要	9
2. 調査の結果	10
3. 小 結	16
IV 前田遺跡（第Ⅰ調査区）	17
1. 調査の経過と概要	19
2. 土坑（SK-01）	21
3. 遺構外出土遺物	21
4. 小 結	22

I 位 置 と 環 境

八雲村は松江市の南郊、東経133°、北緯35°に位置し、東を東出雲町、西を大東町、南を広瀬町に囲まれた東西8km、南北10km、面積約55.41km²の山村で、総面積の80%以上が山林にあたる。

村の中央を意宇川が北流し中海に注いでおり、これに流れ込む数本の小河川が合流する下流部に平野が展開している。

遺跡は本村の北側、この川と平野を取り囲む地域に集中し、下流に向かうほど密集する。今回調査を行った山崎遺跡（第2表34）・前田遺跡第I調査区（97）も、この平野の水田中と、これに向かって舌状に突き出した丘陵先端に位置している。

周辺の遺跡としては、古墳時代の遺跡がほとんどを占めるが、少し離れた南西にある熊野空山山頂に、前期旧石器と考えられる石器が出土した空山遺跡が存在する。握斧、握椎と推定される石器が、洪積層の崖面から検出され、また、玉髓や瑪瑙の半製品が道路の掘削面より採取されている。同遺跡からは縄文時代に属する石簇や石匙が発見されており、縄文時代中期頃まで人々の生活の舞台となっていたことが認められている。しかし、本村では弥生時代前期・中期の遺跡、遺物はほとんど知られていない。

弥生時代後期の遺跡としては折原峠遺跡（101）が存在する。後世の掘削により大部分が失われているが、竪穴住居跡から九重式の甕が出土している。また、折原峠遺跡から100m北西に行った同丘陵には、弥生時代後半～古墳時代前期初頭の竪穴住居跡5棟が見つかった折原上堤東遺跡第II調査区（88）が位置する。

古墳時代前期の遺跡としては、3基の方墳からなる小屋谷古墳群（22）が存在する。内部主体は箱式石棺、壺棺及び組合式木棺であり、副葬品としては3号墳の組合式木棺内から刀子1本と四面鏡1面が出土している。

中期以降の遺跡では、増福寺古墳群（42）・土井古墳群（19）・増福寺裏山古墳群（41）などの古墳群が平野東の低丘陵上に分布している。増福寺古墳群は一辺6.0～14.5mの方墳26基によって構成されている。調査されたうち20号墳の西裾平坦面からは、古式の子持磧が出土し、古墳の時期を知る上で注目される。土井古墳群は、増福寺古墳群の北側に位置する古墳群で、一辺7.0～11.0mの方墳13基によって構成されている。増福寺裏山古墳群は土井古墳群と同じ丘陵に立地し、一辺10m前後の方墳8基から成り、まとまりをみせる。これらは尾根により便宜上3つに分けられているものの、本来は同一の群と考えられる。総数47基を数えるこれらの古墳群は、密集度において、松江市大草町に在する西百塚山古墳群と同一の群をなしていたと考えられる八雲西百塚山古墳群（21）に次ぐものである。この時期の住居跡には、折原上堤東遺跡第I調査区があげられる。方形の竪穴住居跡4棟が見つかり、このうちS I-03からは泥岩裏有孔円板4点が出土し、住居内祭祀の遺構として知られている。

古墳時代後期に入ると、出雲地方東部に多い石棺式石室をもつ雨乞山古墳（1）が平野北東にそびえる雨乞山南麓に築かれた。墳丘は現状で7.5×8.0m、高さ2.5mを測り、方墳と考えられる。意宇川下流域の古墳の影響を受けたこの古墳は、八雲村最大規模の石室を有し、この地域の有力な豪族の存在が窺わ

れる。一方、家族墓的な性格をもつ横穴墓については四歩市横穴墓群（3）が、増福寺古墳群の南側の丘陵山腹に分布する。四歩市横穴墓群は、確認できる横穴だけで24穴を数え、平面プランはおおむね方形で、天井は丸天井形をなしている。

奈良時代における当遺跡周辺は、『出雲国風土記』の意宇郡大草郷に属し、意宇川下流域の松江市大草町には出雲国庁や意宇郡家が置かれていた。

[参考文献]

『空山遺跡発掘調査概報』	八雲村教育委員会	1972年
『八雲村の遺跡』	八雲村教育委員会	1978年
『土井13号墳発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1979年
『御崎谷遺跡・小屋谷古墳群発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1981年
『増福寺古墳群発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1981年
『増福寺古墳群発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1982年
『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』	八雲村教育委員会	1994年
『折原峠遺跡終了報告』	八雲村教育委員会	1995年
『石棺式石室の研究』	出雲考古学研究会	1987年



第1図 八雲村位置図

II 調査に至る経緯

一般国道432号線は、広島県竹原市の国道2号道路を起点とし、島根県能義郡広瀬町を経由して島根県松江市で国道9号線に接続する総延長208km（県内延長70km）の道路であり、中国縦貫自動車道に連結する肋骨道路として沿線各地域の開発、産業、文化の交流を促進するために非常に重要な役割を果たしている。

特に、八雲村においては近年新興住宅地として人口が増加する中、地域の活性化を支える基幹道路として、この路線の重要性が増してきている。しかし、現状での国道432号は、自動車のすれ違いに支障をきたすような狭小な道路であり、かつ梅雨と秋の長雨時に土砂災害も多い。このため島根県松江土木建築事務所では、地形的な制約のある松江市、広瀬町に優先して八雲村東岩坂地内から日吉地内の約8.1km区間をバイパスで整備することになった。

この事業に先立ち、平成4年12月17日に松江土木建築事務所より島根県教育文化課（現在の文化財課）あてに、八雲村別所地区から日吉地区にかけての3.0km区間における埋蔵文化財の有無について照会があった。文化課より連絡を受けた八雲村教育委員会では、平成5年1月22日に合同で対象地の分布調査を実施した。

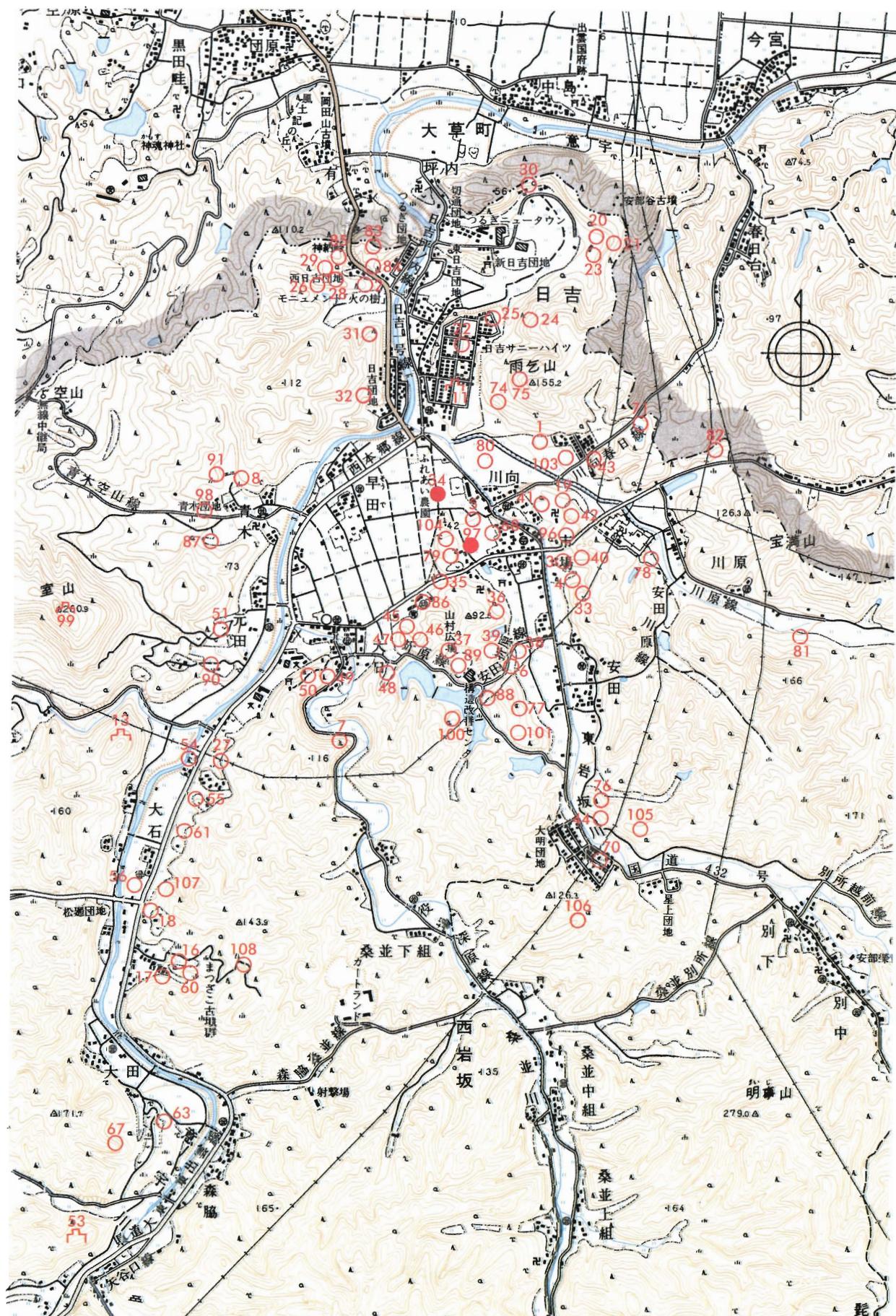
調査の結果、工事予定地内に周知の遺跡3カ所（安田古墳群1号墳・谷ノ奥古墳群・山崎遺跡）と、より詳細な試掘調査を必要とする地域4カ所（安田地区の水田・細田古墳群東の山頂・外輪谷横穴墓群北の斜面・別所間夏堂跡）を確認した。

この後、遺跡保護のための協議がなされたが、計画変更は困難との結論に達し、平成6年度から八雲村教育委員会が主体となり調査を行うことになった。

平成7年度は、山崎遺跡と谷ノ奥古墳群の本調査を予定して予算を計上しており、山崎遺跡の調査が終了した後、谷ノ奥古墳群の地形測量等を実施していた。しかし、松江土木建築事務所より「工事の工程上、谷ノ奥古墳群よりも平成6年度末に実施した‘安田地区の水田’の試掘調査により新たに発見された前田遺跡の方が緊急を要するので、こちらを優先的に実施して欲しい」との意見があった。この要望に基づき協議を行った結果、平成7年度は谷ノ奥古墳群の調査を取り止め、前田遺跡の発掘調査を実施することになった。

第1表 平成7年度国道432号道路改良工事に伴う現地調査工程表

名 称	調査内容	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
山 崎 遺 跡	試掘調査		4/25～5/22										
谷 ノ 奥 古 墳 群	地形測量			5/31～6/12									
前田遺跡第Ⅰ調査区	本 調 査				6/22～7/24								
前田遺跡第Ⅱ調査区	本 調 査					8/7～3/31							



第2図 位置と周辺の遺跡 (1 : 25,000)

第2表 周辺の遺跡一覧表

番号	名 称	種 別	概 要	番号	名 称	種 別	概 要
1	雨乞山古墳	古 墳	方墳 石棺式石室	50	岩坂神社横穴墓群	横穴墓群	須恵器
2	岩坂陵墓参考地	古 墳	円墳	51	古城遺跡	散 布 地	住居跡、縄文土器
3	四歩市横穴墓群	横穴墓群	28穴確認、須恵器	53	舛形山城	城 跡	
4	高丸横穴墓群	横穴墓群	4穴確認	54	雲場古墳	古 墳	
5	池ノ尻古墳	古 墳	石棺式石室、須恵器	55	掛合遺跡	散 布 地	須恵器
6	安田横穴墓群	横穴墓群	2穴	56	田中社跡	神 社 跡	
7	岩屋口横穴墓群	横穴墓群	8穴	60	松廻遺跡	土 墓	須恵器
8	青木横穴墓群	横穴墓群	2穴確認	61	大石窯跡	窯 跡	須恵器
11	東岩坂要害山城跡	城 跡	山城、石垣、消滅	63	恩部遺跡	散 布 地	須恵器、土師器、黒曜石
13	大石城跡	城 跡	山城	67	恩部山横穴墓群	横穴墓群	
16	松廻古墳群	古 墳 群	方墳4基以上	68	紙屋遺跡	散 布 地	磨製石斧
17	松廻横穴墓群	横穴墓群	8穴以上	70	鉢谷遺跡	散 布 地	消滅、大明団地
18	高野横穴墓群	横穴墓群	直刀、鉄鎌、斧他	71	穴田遺跡	散 布 地	円筒埴輪、土師器
19	土井古墳群	古 墳 群	方墳13基	74	雨乞山古墳群	古 墳 群	方墳2基
20	大円寺上古墳群	古 墳 群	円墳2基	75	雨乞山遺跡	祭祀遺跡	土師器
21	八雲西百塚山古墳群	古 墳 群	方墳47基	76	細田古墳群	古 墳 群	方墳2基確認
22	小屋谷古墳群	古 墳 群	方墳3基、消滅	77	松ノ前古墳	古 墳	方墳
23	大円寺遺跡	散 布 地	土師器	78	浜井場遺跡	散 布 地	須恵器、土師器
24	大谷古墳群	古 墳 群	方墳2基、子持壺	79	中山五輪塔群	古 墓	石塔、現位置移動
25	御崎谷遺跡	散 布 地	須恵器、土師器、埋没	80	戸波遺跡	住居跡他	須恵器、陶磁器、漆器
26	神納遺跡	散 布 地	須恵器、土師器	81	屋敷谷五輪塔群	古 墓	五輪塔
27	桧廻遺跡	散 布 地	須恵器、土師器他	82	善三郎谷横穴墓群	横穴墓群	8穴
28	神納横穴墓	横 穴 墓		83	落井古墳群	古 墳 群	方墳10基確認
29	神納古墳群	古 墳 群	5基	84	落井東横穴墓群	横 穴 墓	1穴開口
30	和田平横穴墓群	横穴墓群	3穴、埋没	85	落井西横穴墓群	横穴墓群	11穴以上
31	岩海古墳群	古 墳 群	方墳1基、円墳1基	86	禪定寺遺跡	住 居 跡	陶磁器、須恵器、石帶
32	勝負谷古墳群	古 墳 群	方墳2基、円墳2基	87	青木谷遺跡	散 布 地	須恵器、土師器、勾玉
33	高丸古墳群	古 墳 群	円墳2基	88	折原上堤東遺跡	住 居 跡	豎穴住居・掘立柱建物跡
34	山崎遺跡	散 布 地	須恵器	89	折原中堤北遺跡	散 布 地	須恵器
35	中山古墳群	古 墳 群	方墳3基	90	上元田遺跡	散 布 地	須恵器、土師器、黒曜石
36	谷ノ奥古墳群	古 墳 群	方墳2基、円墳1基	91	椎木谷遺跡	散 布 地	須恵器、土師器
37	北折原遺跡	古 墳 他	方墳1基、横穴2穴	96	増福寺横穴墓群	横穴墓群	2穴確認
38	安田古墳群	古 墳 群	円墳2基	97	前田遺跡	祭祀遺跡	自然河川跡、木製琴
39	外輪谷横穴墓群	横穴墓群	12穴、刀	98	青木遺跡	住 居 跡	豎穴住居・掘立柱建物跡
40	四歩市古墳群	古 墳 群	方墳6基	99	室山城跡	城 跡	
41	増福寺裏山古墳群	古 墳 群	方墳8基	100	折原中堤遺跡	住 居 跡	豎穴住居跡、土師器
42	増福寺古墳群	古 墳 群	方墳26基	101	折原峠遺跡	住 居 跡	豎穴住居跡、弥生土器
43	原ノ前横穴墓群	横穴墓群	須恵器、鉄器	103	赤坂遺跡	散 布 地	須恵器、土師器
44	細田横穴墓群	横穴墓群	平入家形	104	中山遺跡	散 布 地	須恵器、土馬
45	禪定寺横穴墓群	横穴墓群	6穴	105	宮谷遺跡	生産遺跡	製炭跡
46	禪定寺古墳群	古 墳 群	方墳10基	106	真ノ谷遺跡	住 居 跡	加工段、落とし穴
47	折原横穴墓群	横穴墓群	3穴	107	反田遺跡	散 布 地	須恵器
48	折原下堤遺跡	散 布 地	須恵器、土師器	108	瀧谷奥遺跡	散 布 地	土師器
49	大日堂横穴墓群	横穴墓群	4穴確認、須恵器				

III 山 崎 遺 跡

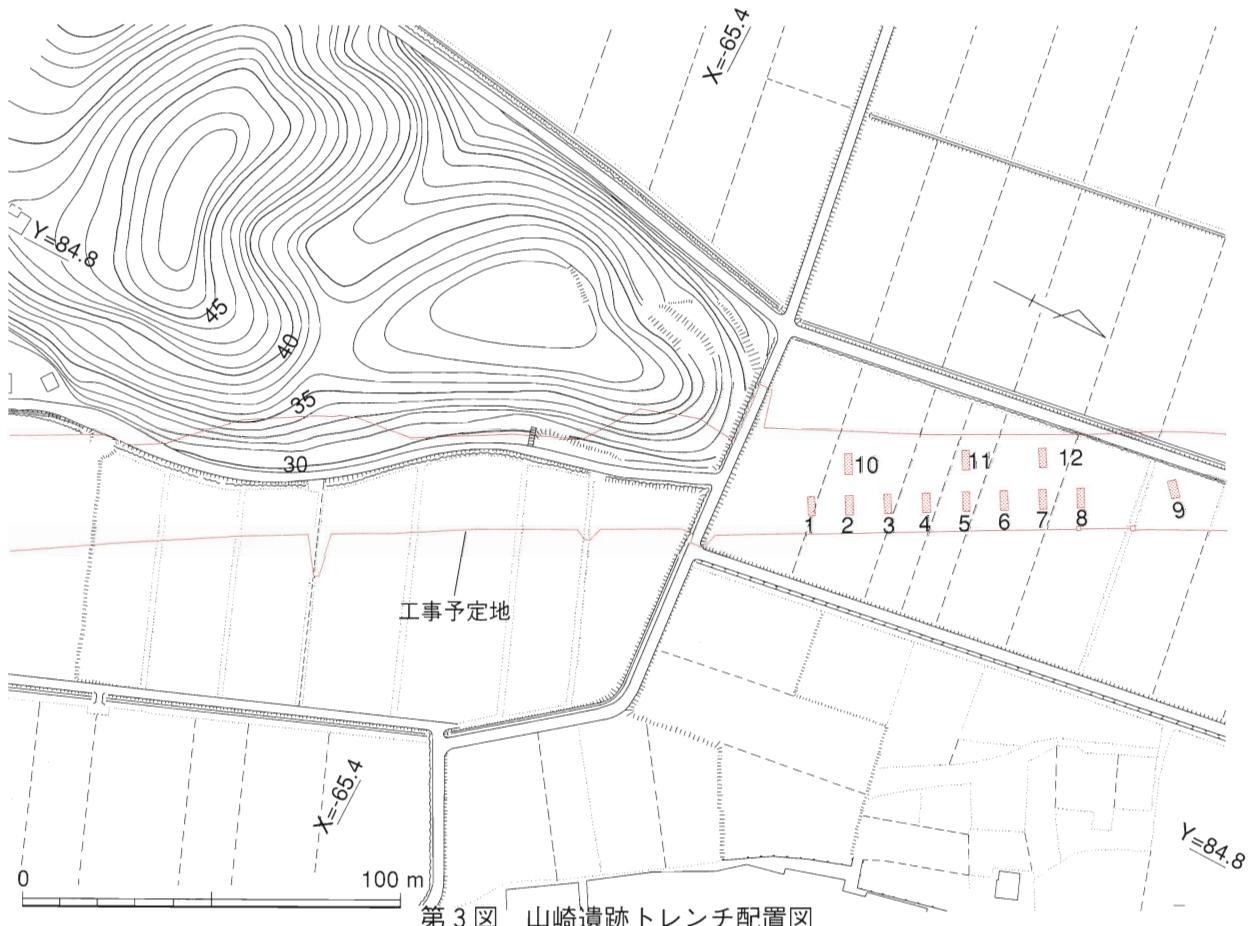
III 山崎遺跡

1 調査の経過と概要

山崎遺跡は八雲村内で最大の広さを有する早田平野の水田中に位置し、調査地で標高23.30～26.08mを測る。昭和52(1977)年度に村内の遺跡の分布調査を行い、主要遺跡についてその概要をまとめた『八雲村の遺跡』(八雲村教育委員会)によると、「水田中の耕作土より須恵器片を採取」とあり、散布地として周知されるようになった。このため遺跡の範囲と性格を把握し、本調査に備える意味での試掘調査を実施することとした。

調査はまず、道路センター杭を利用し $10 \times 10\text{ m}$ グリッドを組み、ここに $2 \times 5\text{ m}$ トレンチ12本を設定した。平成7年4月25日より表土掘削を開始し、隨時遺構の精査を行った。調査地は水田中であったため湧水が著しく、水を汲み上げながらの作業であった。また、軟弱な粘土であったため度々トレンチが崩れ、掘削は困難を極めた。この後、5月22日に全体写真の撮影、トレンチ断面の実測、地形測量を行った。

山崎遺跡からは遺物は少量出土したものの遺構は全く検出されず、試掘調査によって、現地での調査を終了した。当初本調査を予定していたので、調査終了時から工事着手までやや時間が空く形となった。調査地が通学路に近く危険なため前田遺跡第Ⅱ調査区の重機による表土掘削作業に併せ、トレンチの埋め戻し作業を行っている。

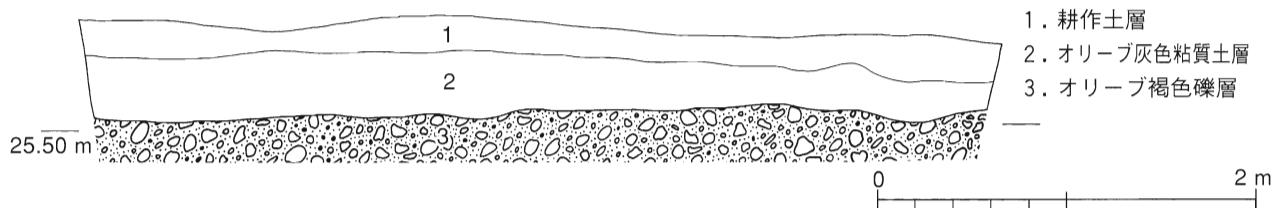


第3図 山崎遺跡トレンチ配置図

2 調査の結果

① 第1トレンチ（第4図）

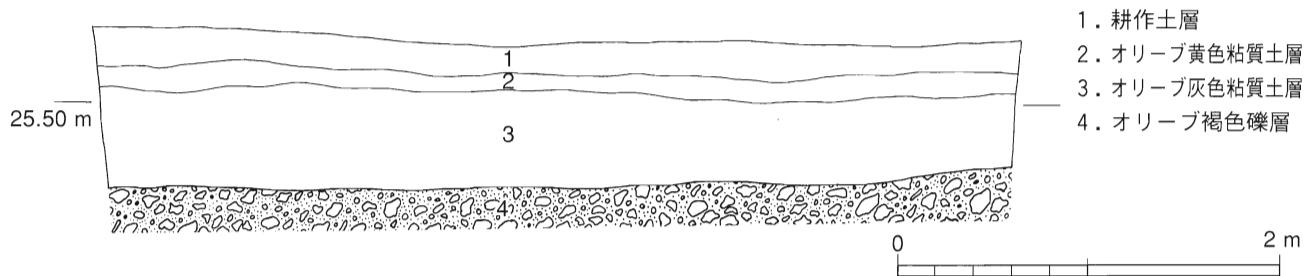
地表面から33～50cm掘り下げたところで、拳大の川原石を多く含む礫層（無遺物層）を確認した。遺物としては第1層から黒曜石の破片2点と須恵器の破片2点が出土したが、細片のため図化できるものではなかった。



第4図 第1トレンチ土層断面実測図

② 第2トレンチ（第5図）

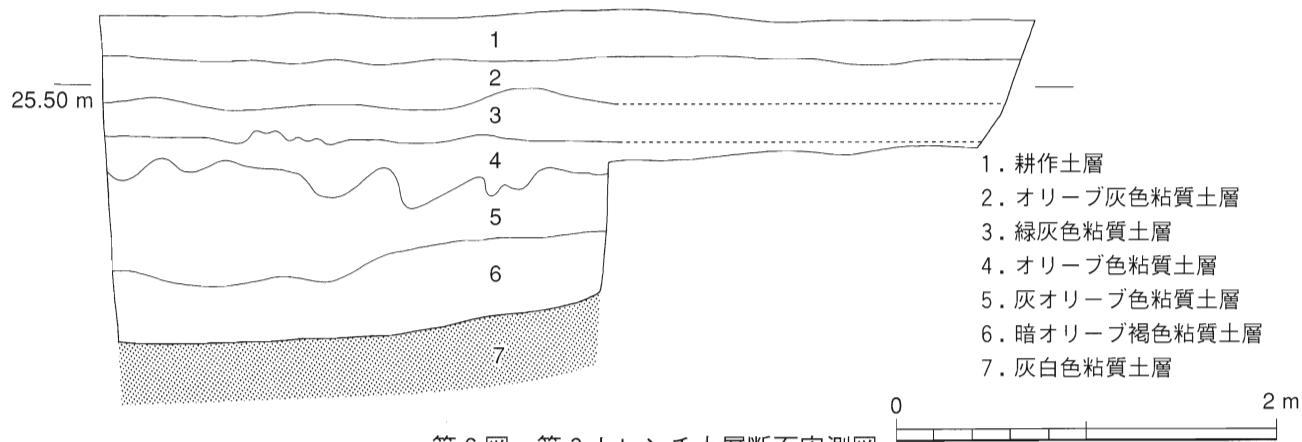
地表面から62～80cm掘り下げたところで、拳大の川原石を多く含む礫層（無遺物層）を確認した。遺物としては第3層より須恵器の破片4点と土師器の破片1点が出土したが、細片のため図化できるものではなかった。



第5図 第2トレンチ土層断面実測図

③ 第3トレンチ（第6図）

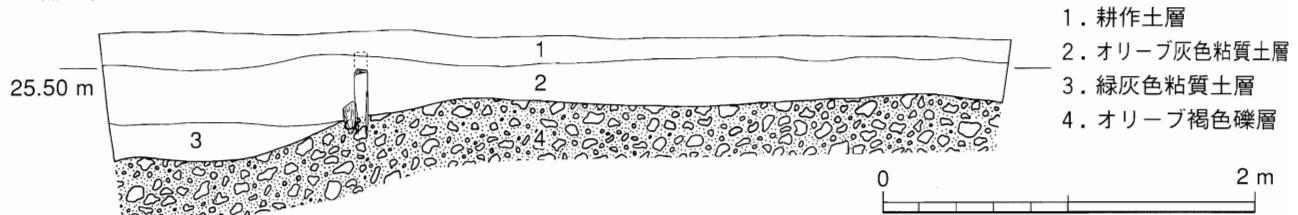
地表面から153～159cm掘り下げたところで、灰白色粘質土層の地山を確認した。このトレンチは第3層（無遺物層）より下は、規模を縮小して2×2.5mの範囲で掘削を行った。遺物としては第1層より須恵器細片1点と土師器の細片2点が出土したが、図化できるものではなかった。



第6図 第3トレンチ土層断面実測図

④ 第4トレンチ(第7図)

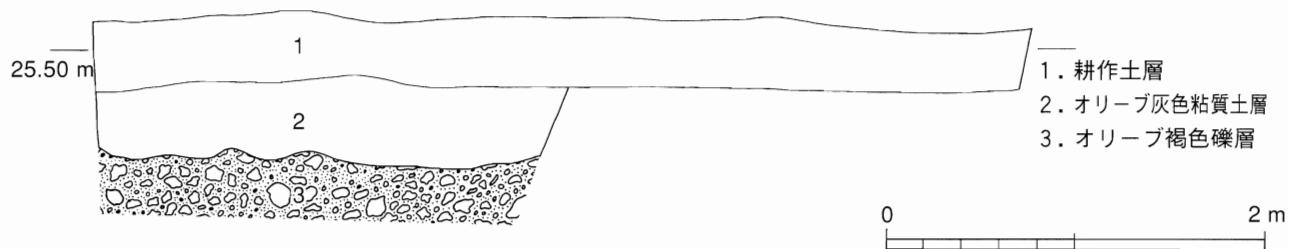
このトレンチからは圃場整備前の水田跡を検出している。さらに掘り下げると、地表面から30~70cm下で、拳大の川原石を多く含む礫層(無遺物層)を確認した。遺物としては第1層より須恵器2点と陶磁器1点が出土したが、細片のため図化できるものではなかった。



第7図 第4トレンチ土層断面実測図

⑤ 第5トレンチ(第8図)

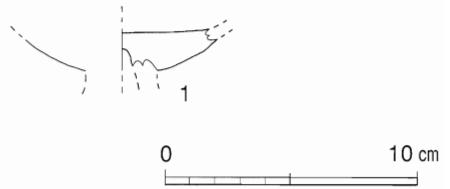
耕作土層より下は規模を縮小して2×2.5mの範囲で掘削を行った。地表面から69~80cm掘り下げたところで、拳大の川原石を多く含む礫層(無遺物層)を確認した。遺物としては第1層下層より土師器の高坏1点が出土した。



第8図 第5トレンチ土層断面実測図

第5トレンチ出土遺物(第9図)

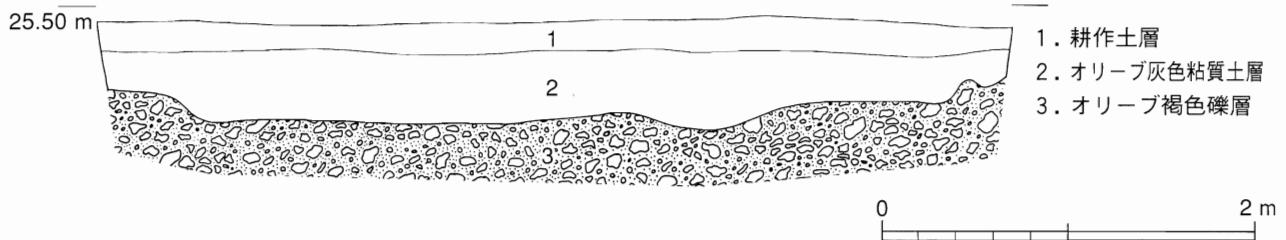
(1)は高坏受部の破片であり、色調は橙色を呈する。底部中央に幅0.6cm、深さ0.8cmの刺突痕をもち、周辺に脚部が離れた痕跡が残る。調整は風化が著しく不明である。



第9図 第5トレンチ出土遺物実測図

⑥ 第6トレンチ(第10図)

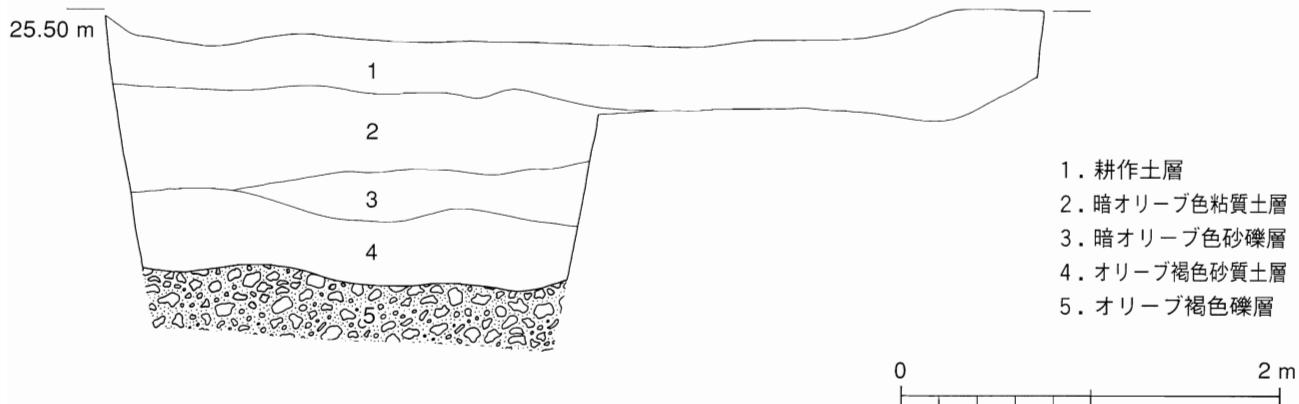
地表面から26~59cm掘り下げたところで、拳大の川原石を多く含む礫層(無遺物層)を確認した。遺物は出土していない。



第10図 第6トレンチ土層断面実測図

⑦ 第7トレンチ（第11図）

耕作土層より下は規模を縮小して $2 \times 2.5\text{m}$ の範囲で掘削を行った。地表面より $117\sim130\text{cm}$ 掘り下げたところで、拳大の川原石を多く含む礫層（無遺物層）を確認した。遺物としては第1・2層より黒曜石4点、須恵器片10点、土師器片2点、現代の瓦1点が出土したが、いずれも細片であり、図化できるものではなかった。



第11図 第7トレンチ土層断面実測図

⑧ 第8トレンチ（第12図）

地表面から $132\sim156\text{cm}$ 掘り下げたところで、拳大の川原石を多く含む礫層（無遺物層）を確認した。第1・2層が遺物包含層であり、大半のものが第2層からの出土である。遺物としては須恵器16点、土師器片14点、黒曜石1点、打製石斧10点が出土した。

第8トレンチ出土遺物（第14図）

須恵器 ここでは実測可能な3点と図面上で復元したものを図示している。1～3は何れも第2層からの出土であり、胎土・焼成・色調などから同一個体と考えられる。

(1)は蓋の破片である。擬宝珠状の摘部で、摘部径 3.3cm を測る。調整は回転ナデが施され、色調は灰色を呈する。

(2)は蓋の破片である。平坦な上部より大きく「ハ」の字状に広がるもので、上部中央外面に摘部が剥離した痕跡が残る。調整は回転ナデで、上部外面の切り離しには回転糸切りが施され、無調整のままである。

(3)は蓋の破片である。口縁部が屈曲し、「ハ」の字に下垂する端部をもち、復元口径 19.0cm を測る。調整は内外面とも回転ナデが施され、色調は灰色を呈する。

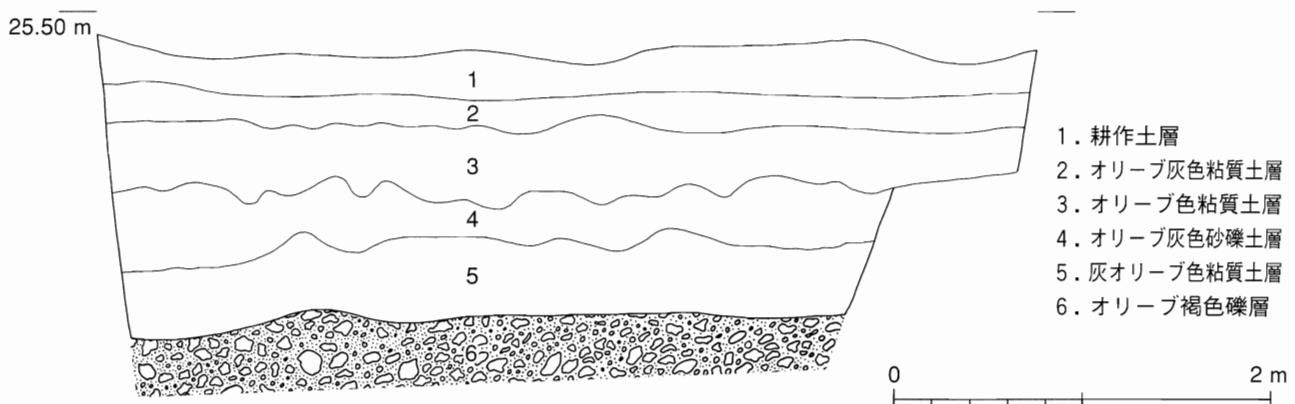
打製石斧 打製石斧と考えられる流紋岩の破片が10点出土したが、ここには2次加工の判る6点を図示した。いずれのものも主要剥離面を大きく残し、縁辺に大きく荒い加工が施されている。

(4)は刃部を欠いているためはっきりしたことは判らないが、幅広の刃部を持つバチ形のものと考えられる。法量は現存長 16.8cm 、幅 $5.8\sim7.8\text{cm}$ 、厚さ 2.9cm 、重さ 402.8g を測る。

(5)は扁平な石材を使用し、側縁部に大まかな剥離が加えられる。刃部に向かって緩やかに開いており、バチ形に近いものになると思われる。法量は残存長 11.3cm 、幅最大 9.2cm 、厚さ 1.3cm 、重さ 163.1g を測る。

(6)(7)は頭部部分の破片である。法量はそれぞれ現存長14.1cm、幅6.4cm、厚さ3.2cm、重さ333g・残存長11.7cm、幅6.7cm、厚さ2.2cm、重さ222.6gを測る。

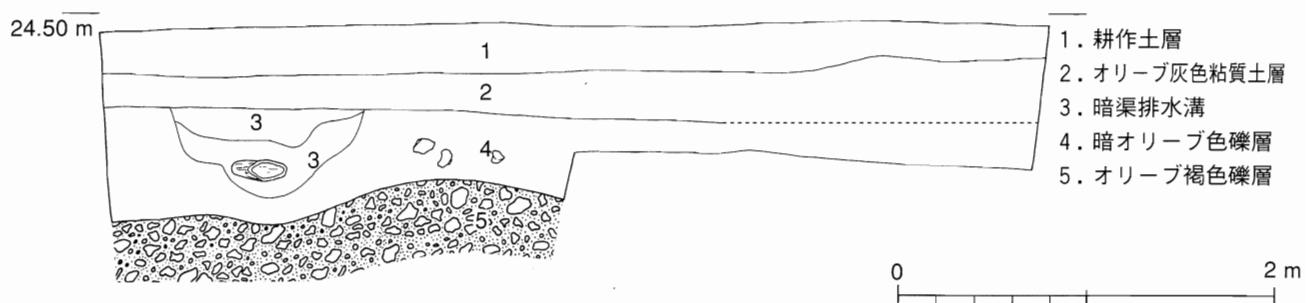
(8)(9)は前述のものに比べると厚さが薄く、比較的細かな2次加工が施されているものである。法量はそれぞれ現存長5.2cm、幅9.4cm、厚さ1.3cm、重さ79.4g・残存長4.2cm、幅8.6cm、厚さ1.3cm、重さ56.3gを測る。



第12図 第8トレント土層断面実測図

⑨ 第9トレント (第13図)

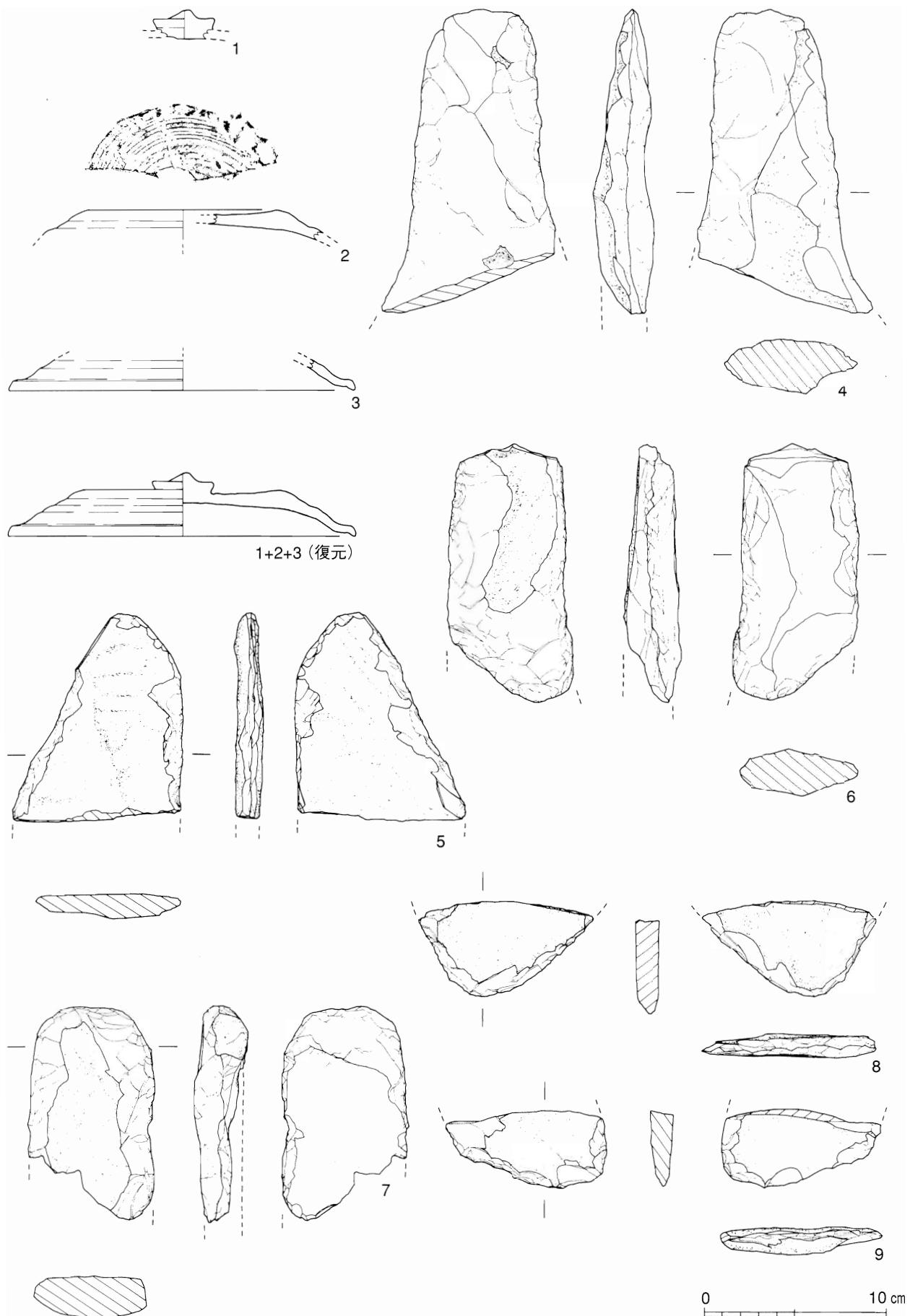
第2層より下は規模を縮小して2×2.5mの範囲で掘削を行った。暗渠排水の掘り込みを検出したが、これを無視して掘り下げると、地表面から80～104cmの所で、拳大の川原石を多く含む礫層(無遺物層)を確認した。遺物としては第1・2層より須恵器4点、土師器3点、黒曜石5点が出土したが、細片のため図化できるものではなかった。



第13図 第9トレント土層断面実測図

⑩ 第10トレント

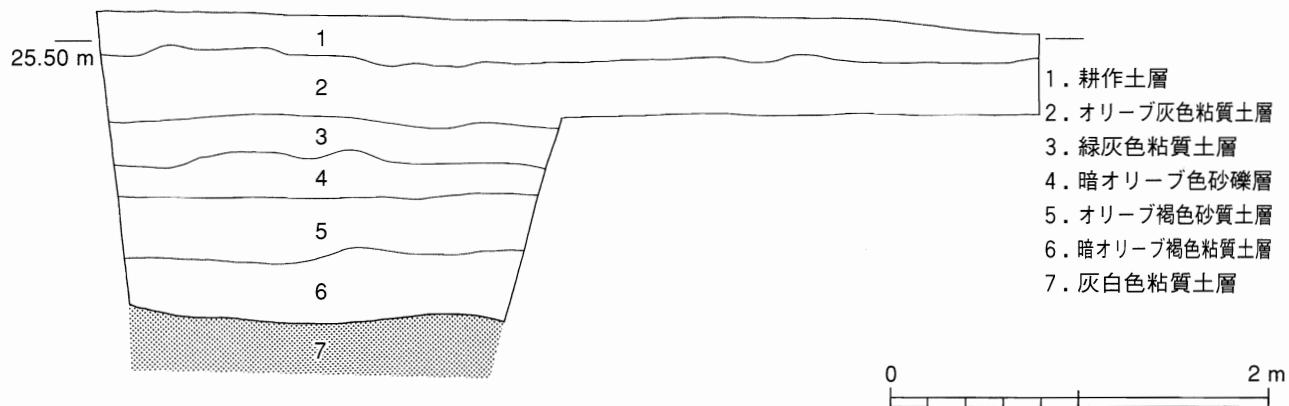
160cm程度掘り下げ、灰白色粘質土層の地山が現われ始めていたところで壁が崩れ始め、危険であるとの判断から作業を中止した。間もなく四方の壁が完全に崩落してしまったため、土層断面の実測も行えなかった。遺物は出土していない。



第14図 第8トレンチ出土遺物実測図

⑪ 第11トレーニチ(第15図)

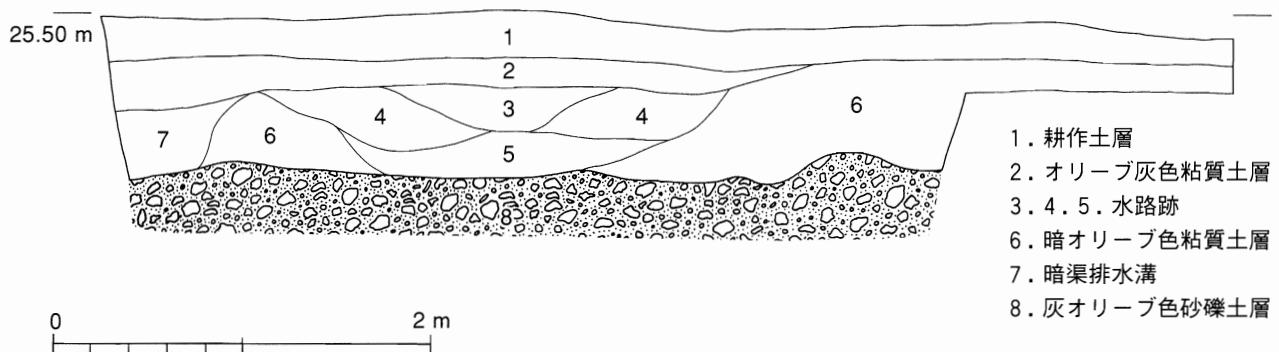
第2層より下は規模を縮小して $2 \times 2.5\text{m}$ の範囲で掘削を行った。地表面より $155\sim163\text{cm}$ 掘り下げたところで、灰白色粘質土層の地山を確認している。出土遺物としては第1・2層より須恵器1点、土師器1点、陶磁器1点が出土したが、細片のため図化できるものではなかった。



第15図 第11トレーニチ土層断面実測図

⑫ 第12トレーニチ(第16図)

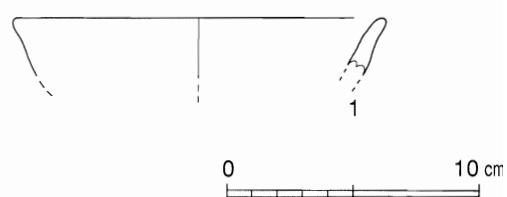
第1層より下は規模を縮小して $2 \times 2.5\text{m}$ の範囲で掘削を行っていたところ、水路跡を検出したため2mの拡張を行った。川底の第5層からは、須恵器に混じって瓦や電球のソケットが出土していることから、圃場整備前の用排水路であったと思われる。さらに掘り下げたところ、地表から $65\sim85\text{cm}$ で、拳大の川原石を多く含む礫層(無遺物層)を確認した。第1・2層と第5層が遺物包含層であり、須恵器6点、土師器2点、陶磁器6点、黒曜石1点、現代の瓦2点が出土した。



第16図 第12トレーニチ土層断面実測図

第12トレーニチ出土遺物(第17図)

(1)は第2層より出土した須恵器坏口縁端部の破片であり、復元口径 14.8cm を測る。丸みをもって立ち上がる体部が、端部付近で緩く外側に折れ曲がる。調整は回転ナデが施され、色調は灰色を呈する。



第17図 第12トレーニチ出土遺物実測図

3 小 結

今回の山崎遺跡の調査では、遺構は確認されなかった。また、遺物は少量出土したものの、その大部分が耕作土層からの出土であり、試掘調査をもって当遺跡の調査を終了した。

周辺の地形を観察すると、南東側の標高が徐々に高くなり、ここには紙屋遺跡(第2図68)、池ノ尻古墳(同図5)、前田遺跡第Ⅱ調査区が存在し、広い範囲で須恵器片や第14図で図示した流紋岩の破片を採取することができる。

平成7年度に調査を行った前田遺跡第Ⅱ調査区からは旧河川を検出しており^(註1)、この川は紙屋遺跡と池ノ尻古墳の間を通り、下流部にあたる山崎遺跡近辺を流れていたと考えられる。従って、今回見つかった遺物の大半は上流部の遺跡からの流れ込みによる可能性が高い。

[註]

- (1) 『前田遺跡第Ⅱ調査区終了報告』 八雲村教育委員会 1996年

IV 前田遺跡

(第 I 調査区)

IV 前田遺跡（第Ⅰ調査区）

1 調査の経過と概要

平成4年度に実施した分布調査により土師器片数点が採取されたため、平成6年度に遺跡の有無を確認するための試掘調査を行った。調査により遺跡の存在が明らかになったため、当地の小字名をとり「前田遺跡」として文化財保護法上の手続きをとった。

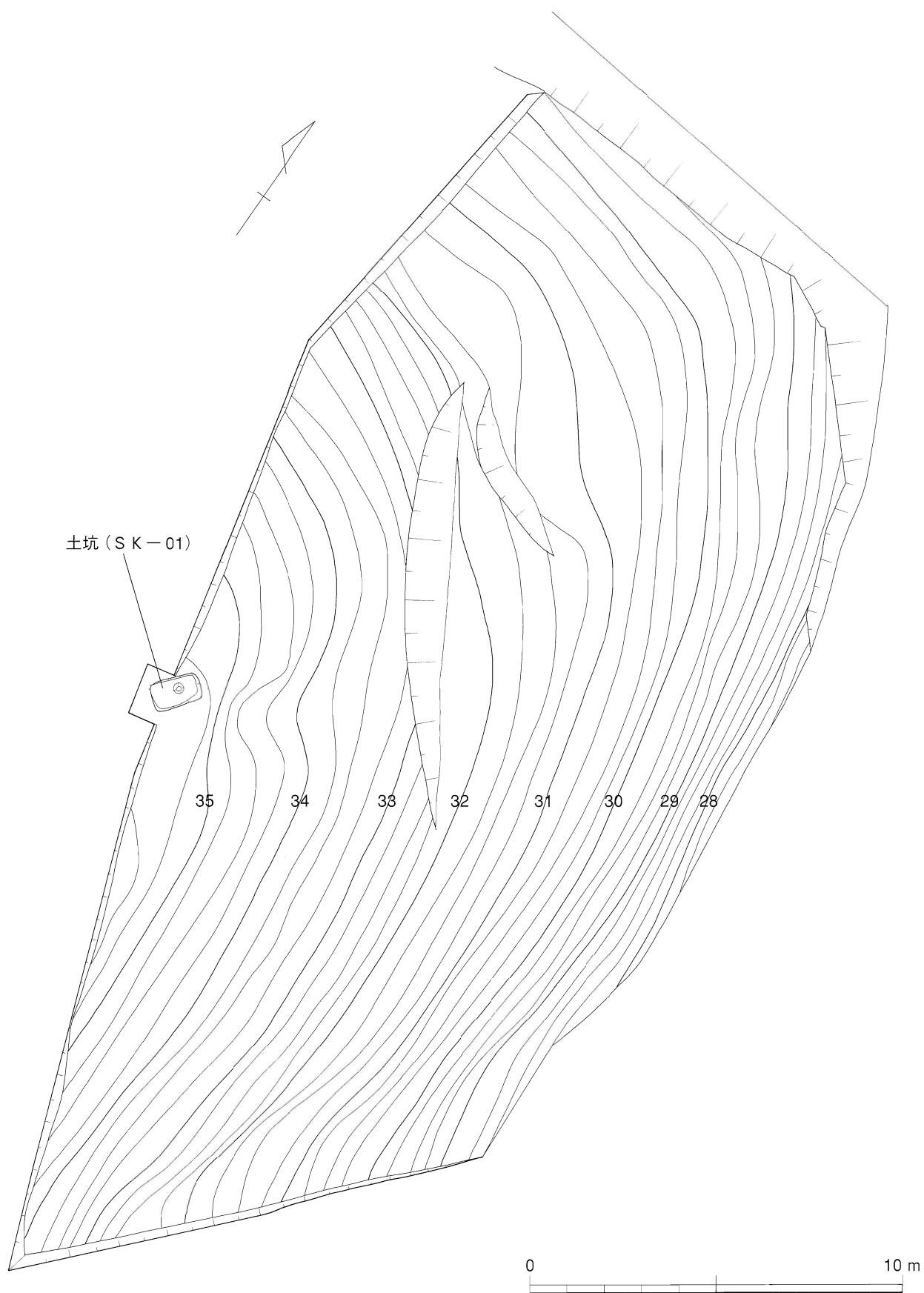
遺跡は舌状に突き出した丘陵先端と水田中に存在していたため、前者を前田遺跡第Ⅰ調査区、後者を第Ⅱ調査区として発掘調査を実施することとなり、その取り扱いも別個に協議した。

第Ⅰ区の調査はまず、試掘調査で落とし穴を検出したトレーナーを拡張する格好で調査区を設定して実施した。平成7年6月22日より表土掘削を開始し、隨時遺構の精査・実測作業を行った。この後7月20日から7月24日の間に地形測量と全体写真の撮影を行い現地での調査を終了した。

第Ⅰ調査区は20cm前後の浅い表土を取り除くとすぐ下が軽石凝灰岩の地山であり、遺物の大半がこの表土層からの出土である。調査地の北東側は後世において畑として利用されており、標高32.00～33.00mを測る場所が大きく削られ、平場が造成されていた。



第18図 前田遺跡（第Ⅰ調査区）配置図



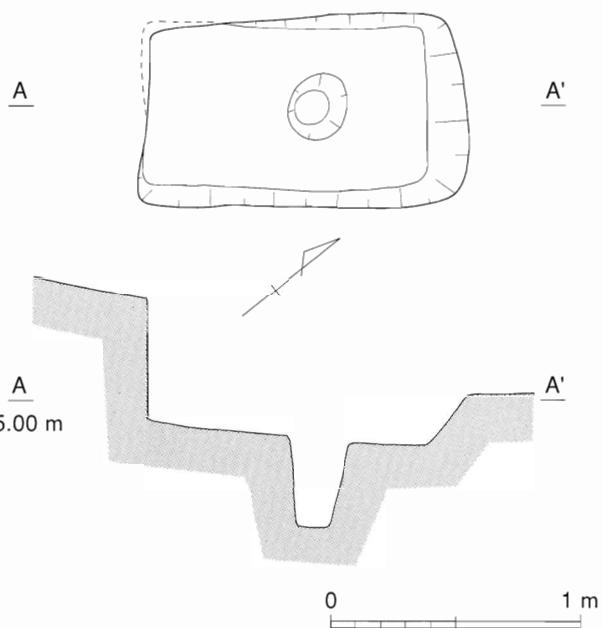
第19図 前田遺跡（第I調査区）遺構位置図

2 土坑 (SK-01) (第20図)

調査区の標高35.00～35.50mを測る斜面で検出された土坑で、軽石凝灰岩の地山に掘り込まれていた。平面形は、上部・底部共に長方形を呈する。壁は急角度に掘り込まれ、底部は平坦で中央には径27.0cm、深さ37.2cmの穴が掘り込まれている。

規模は上縁部が130.0×76cm、底部114.0×65cm、底部から肩部までの深さ最大48.4cmを測る。

遺物は出土していないが、形態などから狩猟用の落とし穴と考えられる。



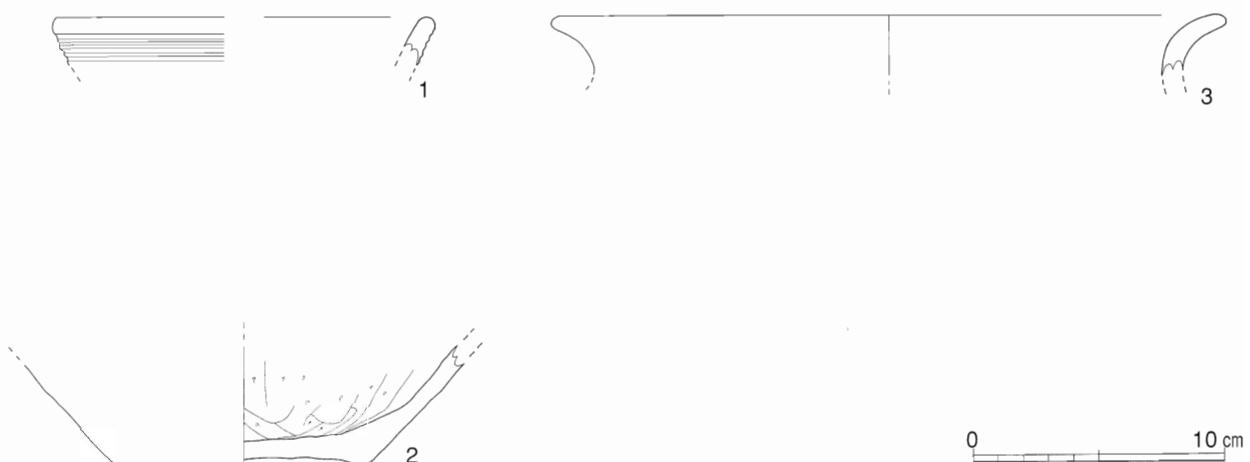
第20図 土坑 (SK-01) 実測図

3 遺構外出土遺物 (第21図)

(1)は口縁端部の破片であり、(2)の中から折り重なるように出土している。おそらく複合口縁をもつものと考えられ、端部は丸くおさめる。調整は外面に4条の擬凹線文を観察することができるが、内面は風化のため不明である。胎土、色調、出土地点から(2)と同一個体の可能性が考えられる。

(2)はしっかりとした平底を有する壺甕類の底部で、やや上げ底気味である。調整は内面にヘラケズリが施されるが、外面はすすが付着しているため不明である。法量は底径9.5cmを測る。地山直上から底部を下にした状態で出土した。

(3)は壺甕類口縁端部の破片で表土層から出土した。外反する口縁をもち、復元口径26.6cmを測る。調整は内外面共にヨコナデが施される。



第21図 遺構外出土遺物実測図

4 小 結

前田遺跡第Ⅰ調査区では、落とし穴1個と少數の遺物を検出するにとどまった。八雲村内で落とし穴と考えられる遺構を検出した遺跡として、折原上堤東遺跡^(註1)、折原峠遺跡^(註2)、前田遺跡第Ⅱ調査区^(註3)、青木遺跡^(註4、5)、真ノ谷遺跡^(註6)が挙げられる。今回見つかった落とし穴は他の遺跡のものに比べると非常に浅いものであった。これは、畠地の開墾及び斜面に立地しているためその大部分が流失してしまったためであろう。

遺物は、その殆どが表土層からの出土であり、これらは流れ込みによるものと思われる。地山直上に据えられるように弥生時代後期と考えられる土器が出土したが、遺構に伴うものではなくその使途は定かではない。あるいは、これも流れ込みによるものかもしれない。

第Ⅰ調査区周辺の地形を観察すると、調査地南西の緩斜面はそのまま尾根上の平坦面に続き、この平坦面は南側へ300mに亘って広がりをみせる。ここには中山遺跡(第2図104)が存在し、住居跡など集落の存在が窺われ、当遺跡と不可分の関係にあったと考えられる。

[註]

- | | | |
|----------------------|----------|-------|
| (1) 『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』 | 八雲村教育委員会 | 1994年 |
| (2) 『折原峠遺跡終了報告』 | 八雲村教育委員会 | 1994年 |
| (3) 『前田遺跡第Ⅱ調査区終了報告』 | 八雲村教育委員会 | 1996年 |
| (4) 『青木遺跡第Ⅱ調査区終了報告』 | 八雲村教育委員会 | 1996年 |
| (5) 『青木遺跡第Ⅲ調査区終了報告』 | 八雲村教育委員会 | 1997年 |
| (6) 『真ノ谷遺跡終了報告』 | 八雲村教育委員会 | 1998年 |

図 版

図版1



遺跡周辺空中写真

図版2 山崎遺跡

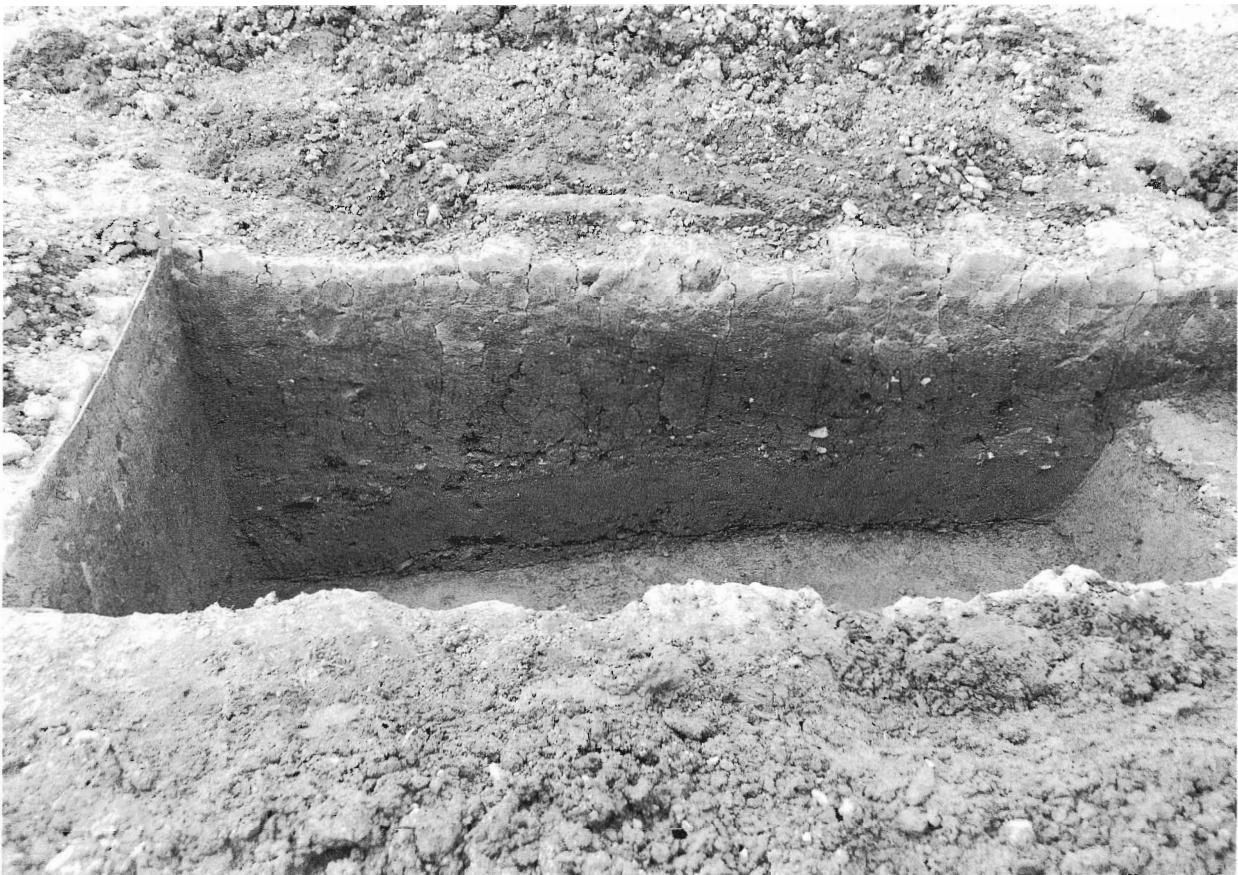


山崎遺跡全景（南より）



発掘調査前全景（南より）

図版3 山崎遺跡

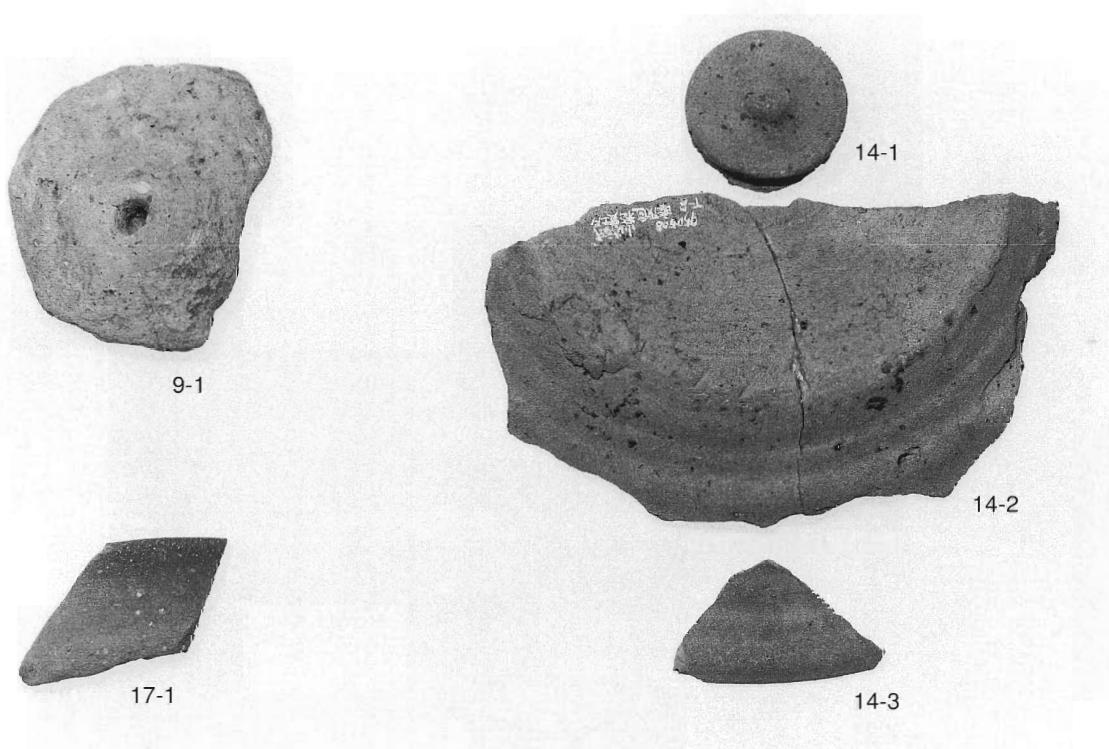


第8トレンチ 土層堆積状況

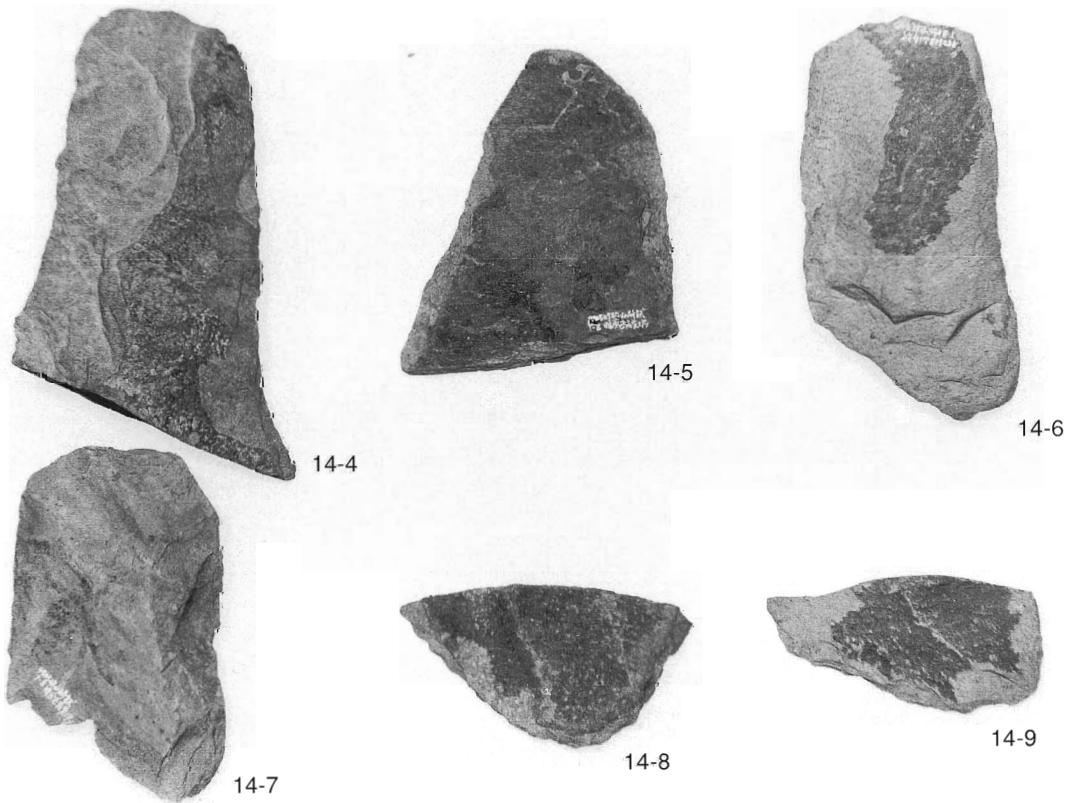


発掘作業風景

図版4 山崎遺跡



第5・8・12トレンチ 出土遺物



第8トレンチ 出土遺物

図版5 前田遺跡（第I調査区）

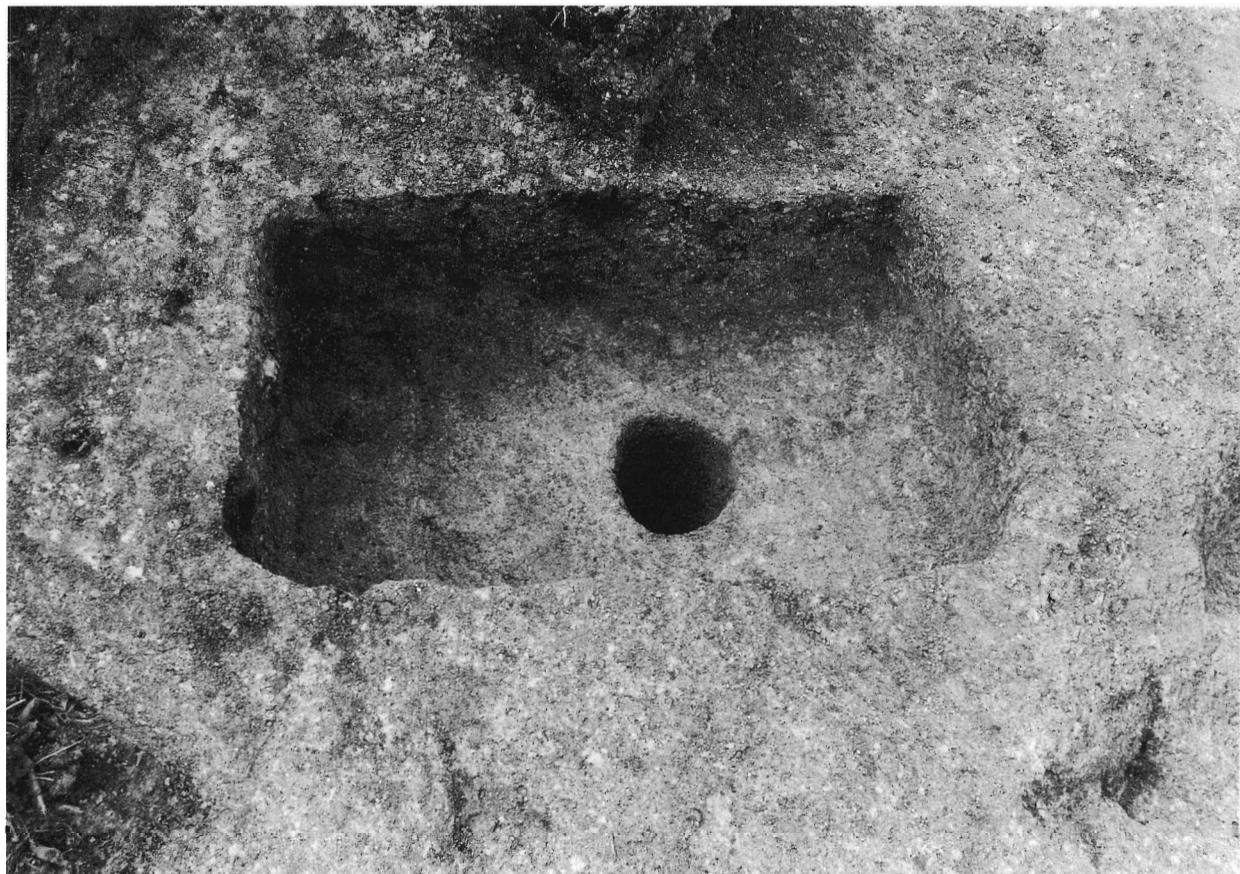


前田遺跡（第I調査区）全景（北東より）



発掘調査前全景（北東より）

図版6 前田遺跡（第I調査区）



土坑（SK-01）全景（南東より）

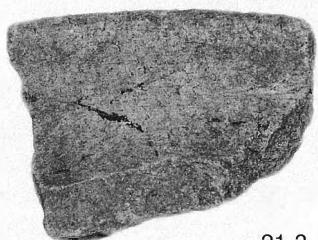


発掘作業風景

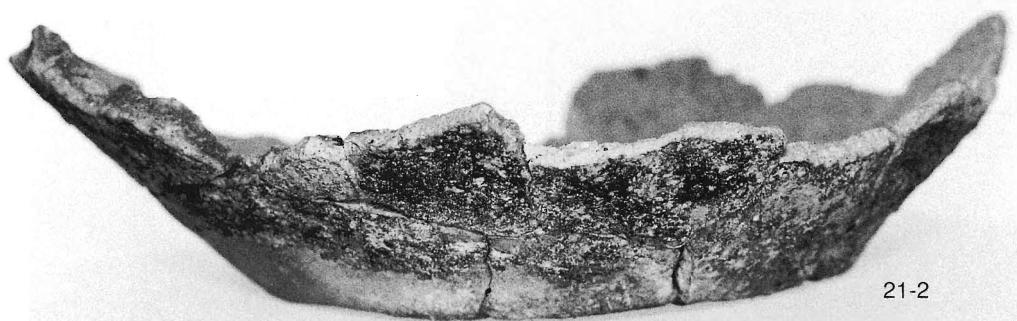
図版7 前田遺跡（第I調査区）



21-1



21-3



21-2

遺構外出土遺物



現在の山崎遺跡・前田遺跡（第I調査区）（南東より）

報 告 書 抄 錄

ふりがな	やまざきいせき・まえだいせき (だいいちちょうさく)				
書名	山崎遺跡・前田遺跡（第Ⅰ調査区）				
副書名	一般国道432号道路改良工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ				
卷次	八雲村文化財調査報告16				
編集者名	川上昭一				
編集機関	八雲村教育委員会				
所在地	〒690-2103 島根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地 TEL(0852)54-2478				
発行年月日	平成11（1999）年12月28日				
所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積(m ²)
		市町村	遺跡		
山崎遺跡	島根県八束郡 大字東岩坂	32305	F34	19950425～ 19950522	120
前田遺跡 (第Ⅰ調査区)	島根県八束郡 大字東岩坂	32305	F97	19950622～ 19950724	394
調査原因	一般国道432号道路改良工事に伴う事前調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎遺跡	散布地	縄文時代		打製石斧	試掘調査により調査終了。
前田遺跡 (第Ⅰ調査区)			落とし穴1個	弥生土器	

山 崎 遺 跡
前田遺跡(第Ⅰ調査区)

平成11(1999)年12月

発行 八雲村教育委員会
島根県八束郡八雲村大字西岩坂316番地
印刷 株式会社 島根県農協印刷
島根県松江市浜乃木二丁目10番52号